まえがみ太郎

松谷みよ子 作
渡辺　学 画

まえがみ太郎

松谷みよ子 作
渡辺　学 画
福音館書店発行

まえがみ太郎
©一九六五年十二月一〇日初版発行
一九六六年七月一日　第五刷発行
著　者　松谷みよ子
発　行　福音館書店
東京都千代田区神田三崎町一の八
振替東京一一七六四五
印　刷　精興社
製　本　橋本製本
○無理な扱いをしないのに、お買い上げ後一週間以内にこわれたような本がございましたら、お買い上げ月日、書店名をご明記のうえ、おそれいりますが、本社にご返送ください。責任をもっておとりかえいたします。

もくじ

その一　風ふかん村へきた赤んぼう……2
その二　どうどの山のまもの……15
その三　火の鳥……24
その四　お正月さんのおくりもの……32
その五　ウシオニ淵……42
その六　なきびそ山……50
その七　はじけてとんだ山んじい……62
その八　山の中へきたくじら……72

その九　山の神のお堂……83
その十　長者やしき……95
その十一　竜宮の鉄のつるぎ……105
その十二　山の御殿……118
その十三　長者のお姫さま……127
その十四　大蛇とのたたかい……136
その十五　さいごの洪水……146
その十六　いのちの水をもって……157

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まえがみ太郎

その一　風ふかん村へきた赤んぼう

むかしむかし、山の山の山ん中に、小さな村があった。高い山にかこまれた、まるでおわんの底のような村だったから、ながいあいだ風もふきわすれていった。

そこでこの村は、風ふかん村とよばれていた。

ところが、村の中へはいってみると、風もふかんおだやかなくらしどころか、おそろしいことがあった。

どうどの山という、峰が九十九もあるけわしい山から、ときどき、ひきさかれるようなさけび声がきこえてくる。そのたびに村じゅうがぐらぐらとゆれ、夜ならば、山の上に青く

あるときはむらさきのあやしい光がゆらめいて暗い空をそめた。
ときには火のようにもえた岩や石がふってきて、畑の菜やかぶなどをめちゃめちゃにした。村の人たちはそのたびにおそろしさにふるえ、生きたここちもなかった。
こんなふうだったから、どうどの山にはまものがおるぞ、村からひとあしも出るな、村の外からあやしいものはいれるなと、それが村のおきてのようになっていた。
さて、この村もはずれのほうに、子どものないじいさまと、ばあさまが住んでいた。ふたりはいつも「子どもがひとり、ほしいのい。」と、いいくらしていたが、この年になるまでさずからなかった。
あまりさびしいので、くろという馬を一頭、土間にかい、おもてにも出さんでそだてていた。というのも、せまいこの村では、馬はこやしをとるためのもので、乗ったり、しごとにつかうものではなかったからだった。

ある年のくれのことだった。
あしたがお正月というのに、家のすみからすみまではたいても、もちにする粟ひとつぶ

ない。

おまけに、このあたりではあまりふらない雪がほたほたとふりだして、しんと寒くなってきた。

「やれまあ、あしたはお正月さんがござるというのに、もちの一つもつけず、さびしいお年こしだのい。」

ばあさまはそういって、せつながった。

じいさまはそれをきくとつらくなって、もう一ぺん、家の中じゅうずうっとみわたした。家の中はがらんとして、ただ土間で、くろがいねむりをしているばかりだった。じいさまはくろをじっとみつめていたが、ふいに、

「ばあさまや、くろをつれていこう。せば、もちの一きれ二きれと、とりかえてくれるところがあるかもしれん。」と、いった。

ばあさまはたまげた。

「かわいいくろともちと、とりかえるって？　とんでもないこったに。」

「でもな、ばあさまや。わしらも年をとった。くろにろくろくえさもやれん。ここらでよ

そにやるのが、くろの身のためじゃが。」
「というてもよう、おらはいやじゃ。それにこの雪ん中を、馬ひいて歩いてみさっしゃれ。谷川へころげおちるか、よそさんの畑ふみあらすか、いいことはないぞい。な、やめてくろ。」
ばあさまはそういってとめたが、じいさまはがんこで、
「なになに、これがこの馬のしあわせだ。」
と、雪の中へくろをつれて出ていった。
雪はちょっとさきも見えんほどふりつづいていた。
「ほうい、ようふる雪じゃ。お正月さんはどこまでござったやら。」
じいさまは、うたった。

お正月さんが　ござった
どこまで　ござった
どうどの山の　ふもとまで

ゆずりはに　乗って
ゆずりゆずり　ござった。

そのとき、じいさまはなにかにつまずいて、ばったりころんでしまった。
「はてなあ、おらはこの道をなん十年となく通ってきたが、つまずくようなものは、なにひとつなかったに。」
じいさまはぶつぶついいながら、おきあがりもせず、雪の中をすかして見た。と、たま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

げたことに、雪の中にちいさなひとりのじいさまが、ちょこんとすわっていた。白いひげをふさふさとたらし、目をほそくしてわらっている。

「ひゃ、こりゃどうしたこった。おまえさまはどこのおかたじゃ。なんでまた、この雪ん中に……。」

白いひげのじいさまは、すましていった。

「なに、雪の中もなかなかいごこちがよくてのう。ついゆっくりすわっていたのじゃ。じつはさっきから、一軒一軒、戸をたたいては、ひとばんとめてくだされ、とたのんでみたが、どこでも戸をぴっしゃりとしめられてのう、おい出されましたのじゃ。そこでちょっとひとやすみ。」

「ひとやすみというたって！」

と、じいさまはさけんだ。

「こげな雪ん中にすわっていたら、こごえ死んでしまうがな。さ、ござれござれ、この馬に乗って、おらの家にござれ。」

じいさまはじぶんのようじもわすれ、白いひげのじいさまを馬に乗せて、家にもどって

きた。

ばあさまはふたりを見ると、

「はあれ……、旅のお人。」

といったきり、声もでない。

「おうさ、どこの家でもことわられて、雪ん中にすわってござった。さあ、なにはなくとも火をたいて、つけものにお湯でものんで年とりじゃ。」

じいさまがげんきよくいうと、ばあさまもようやく気をとりなおして、

「そうともさ、そうともさ。なにはなくとも、お正月さんをおむかえせねば……。さあさ、火によっとくれ。」

と、いろりにどっさりたきものをくべた。

白いひげのじいさまはそれを見ると、腰の袋から、すやきのつぼに、白いもちを出した。

「さあ、酒もある、もちもある。いっしょに年こしをしようわい。」

じいさまとばあさまは、まるでゆめのよう。

「こげにうれしいことがあるかのい。」

と、子どものようによろこんで、酒をあたため、もちをあぶり、たのしい夜になった。しまいには、いろりのはしをたたいて、

あした　あしたは　お正月
お正月は　いいもんじゃ
雪より白い　もちくうて
油のような　酒のんで
お正月は　いいもんじゃ

うたうやら、おどるやら、そのうち夜もふけた。
白いひげのじいさまは目をほそめて、
「わしはいままで、かぎりなく年をとったが、こんなたのしい年こしははじめてじゃ。ついては、おまえさまたちに、なんぞおくりものをしたい。なにがほしいか。」ときいた。
じいさまとばあさまは、顔をみあわせて、

「さて、ほしいものはなんじゃろ、ばあさまや。」
「おら、子どもがほしい。」
「またそれをいう。いまさらいうても、しょうのないこっちゃが。」
「ほんにな。」
ふたりはわらいだした。白いひげのじいさまは、うんうんとうなずいて、
「それでは夜があけたら、どうどの山のふもとにあるぶなの森へいくがよい。そこの泉でわか水をくめ。」
といったかとおもうと、ふっとすがたはきえて、あとには木の葉が一まい、はらりとこぼれていた。
じいさまとばあさまは、あっといったまま、声もでない。ようやく木の葉をひろいあげて、じいさまがさけんだ。
「ばあさま、ゆずりはじゃ。」
「ゆずりはだと。なら、あの、お正月さんの乗ってござるゆずりはか。」
「んだ、あのゆずりはだ。」

「なら、あのひげのじいさまは……。」
ふたりはぺったりとすわったまま、腰でもぬけたように、しばらくはうごくこともできなかった。
暗いやみのおくで、にわとりがないた。じいさまとばあさまは、わらぐつをはくと、どうどの山へむかっていった。
まものがすむというどうどの山へは、村の人はもちろんのこと、じいさまもばあさまも足をむけたことがない。山はちかづくにつれてけわしくそそりたち、だまってふたりをみおろしていた。
いつおそろしいさけび声がきこえるかもしれない。いつどろどろと山がゆれうごくかもしれない。しかしふたりはしっかりと手をとりあい、ころびころびしながら歩いていった。
とうとうぶなの森へついた。そのとき、しらしらと夜があけ、木立をとおしてさしこむ朝の光に、まっしろな雪がうすべにいろにそまった。と、アウ、アウ、という声がきこえてきた。
「じいさま、あの声は……。」

「おうさ、あの声は……。」
ばあさまはよたよたとかけだした。
「あぶないがな、ばあさま。」
ばあさまはもう、さきのほうへいってさけんでいた。
「泉があるがな。そのそばに、ほれ、ほれ、なにやらあるが。」
ふたりは、ころがるように、泉のそばにかけよった。
「じいさま、赤んぼうじゃ！」
赤んぼうは、ふじづると麻であんだ布にくるまれていた。朝の光の中に、黒い目をあけて、さむがりもせず、なきもせず、アウ、アウ、と、ひとりごとをいっていた。
「おお、よしよし。いい子じゃ、いい子じゃ。」
ばあさまは赤んぼうをだきあげた。すると、また一まい、木の葉がちった。
「あっ、ゆずりはが……。」
「ならやっぱり、あの白いひげのじいさまは……。」
「お正月さんじゃ！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com